



私の好きな「てしかが」の自然



チシマセンブリ



トウゲビキ

国立公園の中にある町と言っても過言ではない弟子屈町には、自然環境の美しさ、不思議さを物語る材料は山ほどある。

摩周湖であれば、透明度41・6メートルの世界記録を持つ湖水の清澄さであり、歌謡曲「霧の摩周湖」で「躍有名になった霧の発生であり、近づくことのかなわなない湖の神秘さなどが挙げられる。

そのひとつ、水の透明度は1931年の記録をピークに現在は20メートル前後と下降気味ではあるが、日本を代表する湖であることは今も変わりはない。流入する河川も流出する河川もなく、湖面とカルデラ壁に降った雨や雪解け水だけを貯えた自然のままの湖水として、近年では国際的な環境モニタリング組織の環境監視地点のひとつに選定され、地球規模の大気汚染の調査湖となっている。

摩周カルデラに1千年かけて溜まった水質の純度は、長年にわたり観測を続ける南極の分厚い氷層ほどに貴重な存在なのかもしれない。

ところで、摩周湖には、国内外から年間45万人を超える観光客が訪れる。その多くがレストハウスのある第1展望台か第3展望台、あるいは裏摩周展望台から霧に覆われた湖か、または摩周ブルーと呼ばれる神秘的な湖を眺め、旅の記憶とともにカメラに収めるのが一般的だ。

ちなみに夏場に限れば、80%の確率で湖面が見えるという。霧が覆う湖を不運と感じるか、より神秘さを感じて再訪を期するか、人それぞれ千差万別の感じ方があるだ

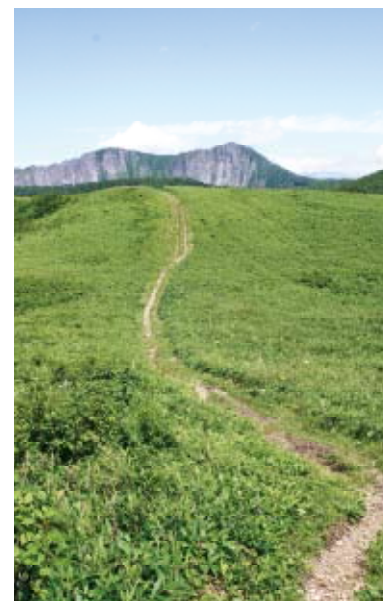
ろうが、あるがままの自然しかない摩周湖ならではの魅力とも言えよう。

霧はもちろんのこと、摩周カルデラを取り巻く大気不思議さ、美しさに魅了された人たちがいる。地元の写真愛好家たちである。個々のテーマは微妙に違うけれども、彼らは年の半分の夜明けを、幻の「第2展望台」で迎える。

町内の写真集団「グループ写真」の隅田恒示さんは、第2展望台に通う理由のひとつに「鋭角な頂の摩周岳とカムイシュ島を結ぶ線上に太陽の光が重なる」と、撮影立地の好さを挙げる。さらに北側のオホツクから忍び寄る霧と南の釧路方面から迫る霧―移入霧がぶつかり合い、湖面に降り立つ情景を目の当たりにできるのも第2展望台と言う。その瞬間、鼓動は高鳴り、カメラを持つ手は震えるそうだ。

静まり返った夜明けのわずかな時間、天と地で季節や気象条件によって刻々と変化する大気のドラマが摩周湖で始まる。

エコツーリズムの波は歴史ある観光地であった摩周湖にも現れ始めた。もともと一部の登山愛好者しか訪れることのなかった摩周カルデラの外輪山へのツアーや、満天の星と雲海に出会う旅が、地元の旅行会社で企画された。展望台から眺めるだけの摩周湖から、様々な表情を見せる摩周湖を体験し



摩周湖の南側に広がる風衝草原

Data: 摩周湖

世界一級の透明度を誇る摩周湖は300～400mの急峻な絶壁の外輪山に囲まれたカルデラ湖で、阿寒国立公園の特別保護地区に指定されている。湖面は海拔351m、周囲約20km、面積19.2km²、水深は平均146m、最大211.4m。湖への立ち入りは厳しく制限されているため、湖に通ずる道路はない。観光の利用では、第1、第3、裏摩周の三つの展望台からの眺望を楽しむのが一般的である。

写真家たちを釘づけにする

摩周湖の霧と、

風衝草原に咲く花々

摩周湖



Mysterious Mist